

木製品の用途説明に向けて

—古代のひょうたん柄杓をあしがかりにして—

宮島 義和

- | | |
|-------------------|----------------|
| I はじめに | IV 呪術性をもつひょうたん |
| II 文献にみられるひょうたん柄杓 | V ひょうたん柄杓の出土状況 |
| III 『延喜式』にみられる「匏」 | VI おわりに |

I はじめに

現在私は、屋代遺跡群出土の木製品の整理を行なっている。この仕事を行なっている上での最大の悩みは、多量の木製品のうち、その多くの用途あるいは使用法がわかりにくいということである。これらのいわゆる「用途不明品」はいくつかに分けられる。主なものとしては、①用途が豊富であるがためそれが特定しにくいもの。②用途は限定しやすいが、その具体的使用法がわかりにくいもの。③使用法が全く不明のものがある。

①については「曲物」があげられる。「曲物」はその器の製作法に対してつけられた名称であり、「刳物」「挽物」と同様である。しかし「刳物」「挽物」についてはその形態から、「椀」「皿」など具体的な用途別の名称をつけることが可能であるが、「曲物」は用途別に分けることが難しい。円形、楕円形、方形というように、底板の形状で分けているが、それぞれどのような役割を持っていたものか具体的に追求していきたい。

②としては木製祭祀具があげられる。「斎串」と名付けられている板状品は、多くの遺跡から出土しており、古代の木製祭祀具として分類されているものの中で普遍的な存在となっている。屋代遺跡群では、2000点ほどの斎串と、「馬形」「へび形」といったような木製祭祀具が多量に出土している。しかし、祭祀（あるいは祓え）においての使用という限定がされても、実際にどのような場でどのように使用されたかについては不明な点が多い。しかし、出土した木製品の大半をこの祭祀具が占めており、木簡とともに屋代遺跡群の性格を知る上での重要な遺物であるため、なんとか説明していきたいものである。

③としては棒状品があげられる。特に削りだしによってつくられた棒状品が数多く出土しており、中には非常に丹念に作り上げられたものも存在する。これらの棒状品は、芯持ち材を利用したものと異なり、その製作には技術を要する。しかしそれらが、何かの部品なのか、単独で使用されたものなのかかわからないものがほとんどである。この用途説明も遺跡の性格を知る上での重要な鍵になりそうな気がする。

遺跡で出土するこのような木製品の具体的な用途を説明していくにはどのようにしたらよいのだろうか。まずは、その製品に対する詳細な観察が必要である。特に、上記③については加

工の状況や使用痕の観察が重要な糸口となるだろう。また同種の製品との比較も必要である。上記①などは、その法量によって用途が異なることが考えられるためその分析が必要となる。さらに遺跡での出土状況や共伴する遺物も大きinateがかりとなる。特に上記②などはどのような遺物とともに出土しているかが、その役割を知る上での重要なてがかりとなるだろう。しかし、木製品には残存しにくいという特性があることから、出土場所も限定されてしまう。多くの場合は溝や流路などから、廃棄という状況で出土することから、条件によっては共伴関係がつかみにくい場合がある。この点、屋代遺跡群の木製品は一括廃棄で捉えられるものが多く、有効な情報になりそうである。これらに加え、他の遺跡での類例や民俗例も参考になるが、この場合は時代性や遺跡の性格を考慮することが重要である。ここでもうひとつのてがかりとしてあげたいのが文献に登場する物品名である。絵巻物を含めて、古代、中世の文献に記載される物品と遺跡で出土する遺物との照合をすることによって、ある程度その用途がつかめるものもあるのではないだろうか。例えば、絵巻物の中には数々の場面に調度品や食器類が描かれている。その中には曲物も頻繁に登場している。大きさや形も多様であり、それと対比することもひとつのてがかりとなるだろう。また、木製祭祀具のひとつである「人形」は、「源氏物語」に人形を流す場面があることから、その使用法の一部が指摘されている（註1）。

そこで本稿においてはひとつの例として、「ひょうたん柄杓」をとりあげて考察し、今後の木製品の用途解明のためのひとつのあしかりとしてみたい。

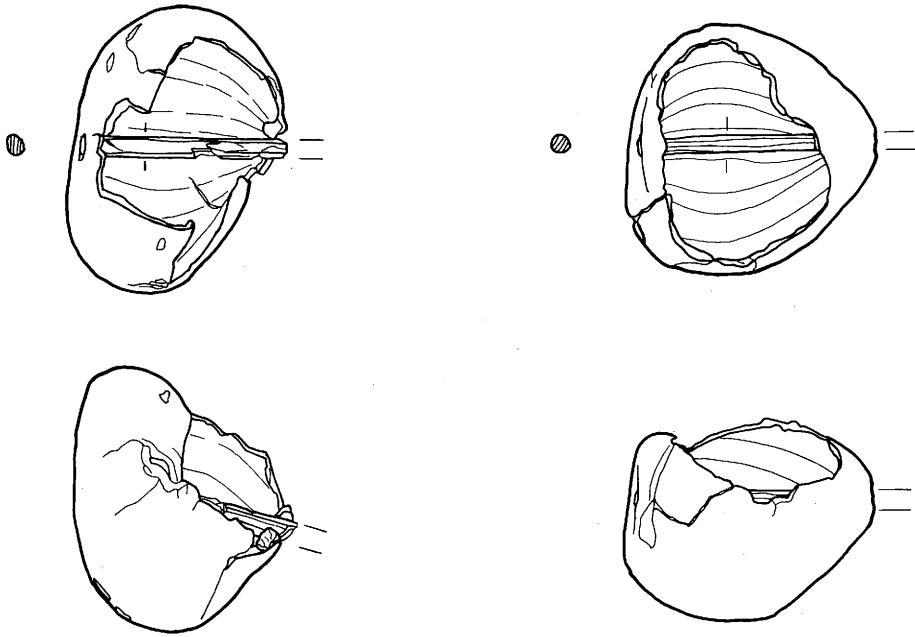
II 文献にみられるひょうたん柄杓

ひょうたん柄杓は、ひょうたんの一部を切り、中身を取りのぞいて器状にし、柄を差し込んで柄杓状にしたものである。最近、奈良・平安時代のものを中心に出土例が増加しているようであり（註2）、屋代遺跡群でも8世紀初頭前後の遺構から2点確認されている（図1、2）。柄杓という名がついているように、その形状から水などを汲む道具であると考えられる。

ひょうたんは「瓠・匏・瓢」の字があてられ、訓みは「ふくべ」「ひさこ（ご）」「なりひ（び）さこ」の3種類がある。いずれもひょうたんそのものを示すとともに、その中身を取り除いて作った容器の意味を持つようである（註3）。

『倭名類聚抄（高山寺本）』には器皿部の木器類に「杓」の項がある。これによると「杓」は「和名比佐古」で「水を汲む器」とし、「瓢」は「和名奈利比佐古」で、「瓠」「匏」と同じで「飲器となすべきものなり」としている。『箋注倭名類聚抄』での解釈によると、『日本書紀』の「仁徳紀」で「匏」を「ひさこ」とよんでいることから、古くはひょうたん、またはそれを割って水を汲む器にしたものが「ひさこ」であったが、後に木を削って作ったものが「ひさこ」と呼ばれるようになったようである。それに対し、本来の「ひさこ」であったひょうたんまたはひょうたん製の容器は「瓢（なりひさこ＝生りひさこ）」と呼ばれ、木製の「杓（ひさこ）」と区別されたようである（註4）。

このように、ひょうたんは古くから容器として利用されていたことがわかり、遺跡から出土するひょうたん柄杓も、『倭名抄』に記載される「奈利比佐古」とつながりがありそうに思わ



第1図 SD7038出土ひょうたん柄杓 S=1/3 第2図 SD8038出土ひょうたん柄杓 S=1/3

れる。ただ、『倭名抄』は「奈利比佐古」を「飲器とすべきもの」としているだけで、それがどのような形状の容器かは不明であり、そのままひょうたん柄杓に結びつけることは難しい。この点に関わって注目したいのが、『延喜式』の特に神祇官関係の式にみられる、各祭祀の祭神料や解除料の中に「匏」が登場する点である（註5）。

III 『延喜式』にみられる「匏」

『延喜式』では各祭に用意すべき物の種類とそれぞれの必要数を細かく規定している。図3は「春日神四座祭」の祭神料である。布類、穀類、魚介類、調度類、容器類など様々な品名がみられるが、その中に「匏」がみられる。「匏」は「四柄」というように単位に柄を用いていることから、ここでは柄杓を示すものと考えられる。さらに「杓 二柄」という記述に注目したい。これもその単位から柄杓と思われ、ここでは2種類の柄杓が祭神料として指定されることになる。前述の『倭名抄』の記載に基づくと、ここに記載されている「匏」は「ナリヒサコ」、「杓」は「ヒサコ」と考えられそうである。ちなみに「匏」は「鳴雷神祭一座」では「ヒサコ（一條家本）」、「春日神四座祭」では「ナリヒサコ（一條家本、九條家本）」とカナがふられており、「杓」は「釀神酒并駆使等食料」においては「匏（ナリヒサコ）四柄」に対して、「エリヒサコ（九條家本）」とカナがふられている。「エリ」は「鑄（刳）る」であるこ

とから、木製の柄杓を示すものと思われ、後世の写本の段階でも同様の解釈がされていたようである。

以上の点から考えて、『延喜式』にみられる「匏」は「ひょうたん製の柄杓」,「杓」は「木を削って作った柄杓」であることが予想され、両者を区別していたことが伺える。

それでは両者に用途の違いがあるのだろうか？

巻一から巻四の中でみると「匏」は40箇所ほどに登場し、祭祀において使用する道具として、かなりポピュラーなものだったことが伺える。それに対し「杓」は9箇所に登場するが、そのうち5箇所は「匏」と共に指定されている。両者とも柄杓であるからその用途は水や酒を汲む道具ということになるが、「匏」が指定されているどの条文にも酒または酒を入れる容器がみられることから、「匏」は「酒と関わりのある柄杓」と考えることができそうである。特に「平野神四座祭」においては、醸神酒料として「甕（酒を醸す瓶）三口」「酒槽三隻」とともに「匏三柄」がみられ、その数量も一致しており、神聖な神酒を醸す道具のひとつとして使用されたことがわかる。この点からも「匏」と「酒」との関わりが指摘できるだろう。

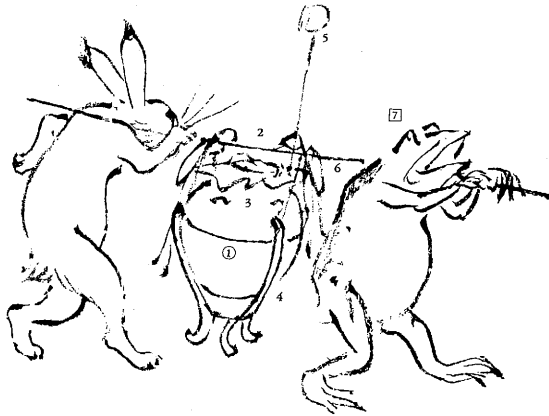
また、柄杓は絵巻物にも数多く描かれているが、ほとんどが曲物製と思われるものの中で、『鳥獣戯画』の中で酒壺とともに描かれている柄杓（図4）は他と異なる形をしている。柄がついているその容器は底部が丸く、ひょうたんの一部を切り中身を削り貫いた形に似ており、ここでも酒を汲む柄杓としてひょうたん柄杓が利用されていた可能性がある（註6）。

もちろん木製の「杓」が酒とは全く無関係な道具であったというわけではない。例えば巻二の九月祭中、「御巫奉齊神祭」、「御門巫奉齊神祭」、「生嶋巫奉齊神祭」では「杓」のみがみえ、それぞれに酒が載っていることから両者の関わりが考えられる。しかし注目したいのは、「匏」と「杓」が同時に指定されている「春日神四座祭」の祭神料、「平岡神四座祭」の祭神料と解除料の3条文である。これらの条文に限って「酒」や「酒壺」、「缶」といった容器の他に「水桶」がみられる。しかも3条文ともに「水桶二口」に対して「杓二柄」というようにそ

春日神四座祭 祭神料

安藝木綿大一斤。純七尺。調布二丈三尺。已上官物。神所請。曝布一端八尺。商布十二段。宮八合。已上封物。内稻六束。膳所送。米。糯米各三斗。大豆。小豆各五升。已上大炊。寮所送。酒一石五斗。醸用。社。酒。鹽五升。鰻堅魚。鳥賊平魚。海藻各六斤。カラカヤ（俵九）。腊十二斤。鮓三斗。雜菓子二斗。橘子一斗。韓竈四具。由加二口。フツリ（俵）。叩盆四口。盆六口。埒十口。洗盤六口。片盤。ホトキ（俵）。片坏各卅口。窪坏廿口。椀形卅口。酒盞八口。クホ（俵）。加。水桶二口。折櫃四合。匏四柄。杓二柄。箕一枚。籬一口。櫛二俵。置簀四枚。食薦十枚。オキス。ス。職所送。已上大膳。

第3図 春日神四座祭 祭神料

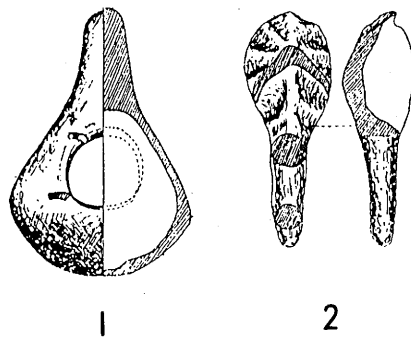


第4図 鳥獣戯画にみられる柄杓と酒壺

の数量が一致している点が興味深い。ここでは木製の「杓」は「水に関わる柄杓」として使用され、「匏」とは用途が分けられていたのではないだろうか。

以上の点から『延喜式』に記載されている祭神料，解除料などとしての「匏」はひょうたん製の柄杓であること。主に「酒」に関わる道具として使用されたいこと。木製の「杓」とは用途が分けられる場合があったことなどが指摘できそうである。

このことに関わって，大場磐雄氏の興味深い考察がある。大場氏は，奈良県三輪山西麓の山ノ神遺跡で出土した土製模造品の内，図5-1を「匏（ひさご）」とし，「植物のひょうたんの実に窓をあけたもの」の模造品，図5-2を「柄杓」とし，「ひょうたんを半截した柄杓」の模造品と捉えている。さらに壺，高杯，堅白，杵，案，箕等を合わせての土製模造品のセットと考え，『延喜式』にみられる醸酒料との比較からこのセットを酒造具の模造品と想定している（註7）。この土製模造品は5世紀後半～末頃のものとして捉えられており（註8），



第5図 山ノ神遺跡出土 土製模造品 S=1/3

祭祀及び酒との関わりの上でひょうたん柄杓（さらにはひょうたん製の容器全般）を考えていく重要な資料と思われる。これについては、今後の類例の増加を待ちたい。

IV 呪術性をもつひょうたん

それでは「匏」が祭祀において用いられたのはなぜだろうか。木製の「杓」よりはるかに高い頻度で「匏」が指定されるのには、「ひょうたん」という素材そのものに意味があるのではないだろうか。このことに関わりそうな文献としては、まず前述の『倭名抄』が引用している『日本書紀』の「仁徳紀」がある（註9）。ここでは「匏」および「瓠」に関わる2つの記事がある。ひとつは、仁徳11年10月の、茨田の堤を築く際の人身御供についての記事である。これは、人身御供に選ばれた茨田杉子が河に「全匏（おふしひさこ）」を2個投げ入れ、それを河神が沈められなかったため人身御供とはならず、命は助かり堤も完成するというものである。さらに同67年の、吉備の中国の川鳴河の竜についての記事がある。これは、笠臣の先祖の縣守が「全瓠（おふしひさこ）」を3つ淵に投げ込み、竜が鹿になってそれを水中へ引き入れようとしたが沈まなかったで、縣守が竜を斬り人々を救うというものである。両方とも「匏（瓠）」の浮沈によって事を決める呪術的行為と受け取られ、河神（河伯）や竜が登場する点が興味深い。さらに、『古事記』の「仲哀紀」に「瓠」がみられる（註10）。ここでは、神功皇后の新羅への渡航に先立ち、神意に従って真木の灰を「瓠」に入れて、箸や比羅伝とともに海に散らし浮かべる儀礼が行なわれたことが記されている。この際の「瓠」は中に真木の灰を入れていることから容器と思われる。以上の3記事ともに「匏（瓠）」を河、淵、海に浮かべていることから水（あるいは水の神）との関わりが伺え、匏の「水に浮く」という特性に一種の呪術性が求められていたように見受けられる。

以上のように古代において、ひょうたんは呪術的行為に使用されることがあった事実が認められ、『延喜式』にみられたように、祭祀において使う柄杓にひょうたんが利用されるのもこのことに深い関わりがあるように思われる。

ここまでは、自分が知る範囲での文献からひょうたん柄杓と思われるものを調べ、その用途について考えてきた。しかしそれはあくまでも文献（特に『延喜式』）からの判断であり、これだけをもって「ひょうたん柄杓＝祭祀において使われる道具」、または「ひょうたん柄杓＝酒に関わる柄杓」という図式は成立しない。さらに他の文献を調べる必要があるとともに、出土したひょうたん柄杓自体が持つ情報を加えて考えていかなくてはならない。

V ひょうたん柄杓の出土状況

ここで、遺跡において出土するひょうたん柄杓に目を転じてみる。

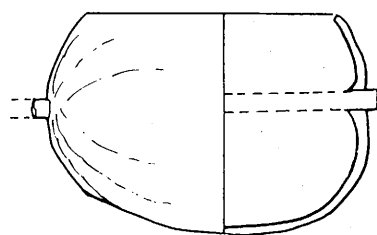
屋代遺跡群は、多量に出土した木簡の分析から、埴科郡家、あるいは信濃国初期国府に関わる遺跡としての可能性が指摘されている（註11）。特に木簡の出土地点である⑥区はおおよそ5世紀後半から8世紀前半にかけて、湧水に関わる祭祀施設が繰り返し造られていた場所である（註12）。また、7世紀後半以降はそれに加えて多量の木製祭祀具の使用が認められる。平川

南氏はこの地点を郡家の西北に位置する祭祀の場と想定している（註13）。ひょうたん柄杓は同じ地点の8世紀初頭前後の遺構で確認された。1点は水門を備えた湧水に関わる祭祀遺構と考えられる溝（SD7038）からの出土で、他に木簡2点（内1点は琴形木製品に転用されたもの）、人形、舟形などの木製祭祀具が出土している。もう1点は自然流路中（SD8038）の出土であるが、周辺からは斎串など多数の木製祭祀具が出土している。このような出土状況と『延喜式』の記載を合わせて考えてみると、やはり屋代遺跡群出土のひょうたん柄杓は「匏」のように、何らかの祭祀において用いられた道具のひとつと考えられそうである。

ただ、8世紀初頭前後の遺物である屋代のひょうたん柄杓と、『延喜式』の成立時期とでは、およそ200年ほどの時間の隔たりがあるという点に注意しなくてはならない。祭祀という行為において用いられた点では共通性があっても、その祭祀の性格や柄杓としての役割が同じであったと判断することはできないだろう。時代が遡る分、屋代のひょうたん柄杓の役割や、それが用いられた祭祀は古い要素を持っていたことが十分考えられるからである。よって、このひょうたん柄杓の具体的な用途については『延喜式』の記載を参考にしながらも、今後の整理作業によって得られる情報を優先して考えていきたい。

なお、ひょうたん柄杓の他に多量のひょうたんも同じ地区で出土している。前述の「記紀」にみられた記事で特に、『日本書紀』の「全匏（瓠）」は丸のままのひょうたんと考えられることから、今後は柄杓だけではなくひょうたんそのものについても注目していく必要がある。

他の遺跡での類例をみると、平城宮（図6）をはじめ、岩手県の柳之御所跡、秋田県の秋田城跡、新潟県の曾根遺跡、富山県の辻遺跡などで出土している。曾根遺跡は郡家に関連する遺跡と考えられており、また辻遺跡では「里正」「郡司射水」と書かれた木簡が出土するなど、いずれも屋代と同様な性格を帯びた遺跡である点が注目される（註14）。さらに検討が必要であるが、これらのひょうたん柄杓もやはり何らかの祭祀行為において使用された可能性があるのではないだろうか。今後も出土例が増加していくことが予想され、その出土状況に注目していきたいと思う。



第6図 平城宮出土のひょうたん柄杓 S=1/3

VI おわりに

木製品の用途の解明に向けての思考錯誤の中から、ひとつの例として屋代遺跡群で出土したひょうたん柄杓の用途を検討してみた。ひょうたんという限定された素材であったため、文献

においても調べやすかったかもしれないが、今後の考察においてひとつのあしかりができたような気がする。しかし「祭祀において用いられた道具」というように使用された場面が狭められただけであり、「どのように使用されたのか」という点の解明には至らなかった。ただ「祭祀に用いられた道具」である以上、それを解明していくことは、屋代の地で行なわれた祭祀の性格を明らかにしていくことと密接に関わる。さらにそれは屋代遺跡群の性格そのものにつながる重要な問題といえる。ひょうたん柄杓を含め、現在「用途不明」としている多くの木製品はこの問題に関わる重要な遺物である。このことを念頭において今後も整理を進めていきたいと思う。

浅学のため文献に対する解釈を誤っている点が多々あると思われる。このことも含め多くの方々からご教示がいただければ幸いである。

なおこの場をかりて、本稿執筆にあたってご教示を下さった福島正樹氏、伝田伊史氏、平出潤一郎氏にお礼を申し上げる次第である。

註1 金子裕之 1989「日本における人形の起源」『道教と東アジア』人文書院

註2 1996年3月に行なわれた、第39回埋蔵文化財研究集会の資料集『古代の木製食器—弥生期から平安期にかけての木製食器—』の中でも数例紹介されている。

註3 中田祝夫、和田利政、北原保雄編『古語大辞典』小学館、を参考にした。

註4 『倭名抄』については、京都大学文学部国語学国文学研究室編『緒本集成 倭名類聚抄』本文編 臨川書店からの引用である。

註5 「延喜式」については図3も含め、黒板勝美『新訂増補 国史大系』吉川弘文館からの引用である。

註6 絵巻物については、澁澤敬三、神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による 日本常民生活 絵引』を参考にし、図4はその第1巻から引用した。

註7 大場磐雄 1967『まつり』学生社

註8 図5は、第2回東日本埋蔵文化財研究会(1993)資料『古墳時代の祭祀 第Ⅲ分冊—西日本編—』の「26 山ノ神遺跡」(文責 前坂尚志)から引用し、年代も概要の記述に従った。

註9 『日本書紀』については『日本古典文学大系67 日本書紀上』岩波書店から引用した。

註10 『古事記』については『日本思想大系1 古事記』岩波書店から引用した。

註11 (財)長野県埋蔵文化財センター『長野県屋代遺跡群出土木簡』

註12 これについては、日本考古学協会1996年度三重大会の資料集『水辺の祭祀』において紹介した。

註13 『長野県屋代遺跡群出土木簡』第5章での指摘による。

註14 平城宮については、奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代編』から図を引用し、他の遺跡については、前掲『古代の木製食器』を参考にした。